
人気も程々に。

更田 空蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人気も程々に。

【Nコード】

N8629I

【作者名】

更田 空蔵

【あらすじ】

自分の意思に反して、全ての人間に好かれ愛されてしまう能力を持った高校二年 たちはなくそう 立花空蔵の一年間を描いた物語。

前書き

気楽に話せる友達が欲しい。

格好良い、可愛い恋人が欲しい。

この年代の少年少女の多くが抱く願いだろう。

例外があるとしたら^{たちはなくぞう}立花空蔵である。

大して偏差値の高くない私立高校に通う一見平凡な十六歳には、誰に言っても間違いなく笑われるだろう大きな秘密が一つあった。

——これは、人智を超えた特殊能力を理由も知らず持ち続けた少年にとって人生の転換期^{ターニングポイント}となった、一生の中で最も壮絶で波乱万丈な一年間である。

人気も程々に。

起床は早いが身なりは悪い。

高校生にもなつて寝癖を直そうともせず髪はボサボサ。半ば意識的に怠け者の表情を演じる。…それは立花空蔵^{たちはなくつぞう}、彼なりの抵抗なのかもしれない。この世界で最も嫌いな『自分自身』への……。

—おはよう—

—おはよう—

—おはよう—

中学…小学校…更に幼稚園の頃の同級生、一度も話したことのないクラスメイト。酷い時は全く面識のない人々にまで、幸福な笑みを向けられる毎日。幸せが憎いなどという馬鹿げた考えこそ抱いてはいなかったが、何処かで読んだ小説の主人公が憂鬱になった気持ちもわからなくはない空蔵だった。

—好きです—

—好きです—

—好きです—

学校にいる間は女子生徒のその言葉を耳にする毎日。

—もてるのにもつたいたない、立花はなんで彼女つくらないの。皆どうせ他人事だ。

『誰にでも無差別に好かれる』ということがどれだけ酷な能力か、わかる人間なんてこの世界にいない。いるはずがないんだ。人間は好かれることもあれば嫌われることも同等あるのだから。誰が本気で俺を好きだなんてわからない……いや、実は誰一人……俺を好きな人なんていないのかもしれない。

それを知ってもこの能力が欲しいというならくれてやる。とんでもない『無いもの強請り』め――

自意識過剰で『イタ』い考え事をしていたのが空蔵最大のミスだった。

「わたしだ。標的だと思われる少年と対峙している。」
ターゲット

そんなことを言いながら現われたのがこの男である。

「学校は関係者以外立ち入り禁止ですよ。」

「……おい小僧、名前は？」

――無視かよ。……変質者かな――

空気が張り詰め、空蔵の視界が突如真っ白になる。

「……っが……あっ」

気がついて驚愕する。空蔵は知らず知らずの内にノックアウトされていた。

「……なに……をっ」

「……まだ扱えていないみたいだが覚醒、抵抗の可能性が危惧される。連行までにあと二十人、加勢を送り込んでくれ。」

人気も程々に。(後書き)

Q どうなるんですか？

A どうなっちゃうんだろう・・・？(笑)

どうやら少年漫画な世界観に巻き込まれたみたいだ。

怪しげな廃墟。

意識を取り戻した空蔵の視界に映った景色だった。

「どうやら少年漫画な世界観に巻き込まれたみたいだ。」

そんな空蔵の独り言を遮るように…、

「虚しくないか？ 虚しくなかつたら相当痛々しいぞ？」

と男が言った。

よく見たら空蔵は手枷足枷で捕縛されていた。

「俺を拉致った奴らといい、あなた達は何者なんですか？」

空蔵のその質問に男…そう、四〇五十程度の中年男は愛想よく答える。

「俺たちに共通の正体はないんでな、そいつは答えできない質問だ。」

「……あんまし意味が……」

冷たい目を向ける空蔵をよそに、男はケラケラ笑いながら煙草を口に持っていく。

「そう蔑まんで欲しいな、俺は立派な立派な犬のお巡りさん。正真正銘の警官さ。」

「警察！？ おいおい、……警察がこんなことしたって言うんですか？」

男は溜息のように煙を吐き出す。

「俺は君の近所の交番に勤務してるしがない警官、名前は城嶋^{じょうしま}淳、よろしくな。」

空蔵は勢いよく立ち上がり警官、城嶋淳を睨む。

しかし、自身が捕縛状態にあることが完全に記憶になかったため、直後に見事な大転倒をしてしまったのだが。

「ほらほら危ないよ。人間ね、冷静クールに生きてかないと身を滅ぼすし、もてないぞ?」

淳の挑発的な口調に反応するように空蔵はもぐく。

「んぐつ……くつそ……!」

「後に危険に身を置く者として老兵の話を邪険にするもんじゃない。」

その言葉を放ったときの淳の表情に空蔵は打ち震えるほどの冷たさを感じた。

直感的にその男がただの能天気な男ではないと悟ったのである。

——待てよ、この城嶋淳とかいう警官、妙だな。——

——俺は誰にも嫌われない、誰にでも愛されるという能力を持っている。——

——だからこそこんなことがあるはずはない。暴行のおまけつきで拉致されたり、やたら神経を逆撫するような口をきかれたり。

——

「お前、俺の能力……というか体質を知ってるだろう?」

空蔵の質問に淳はあからさまにギクリとする。

「あつはつは、何のことを言ってるんだ? 世の中にく嫌われない人間>なんていう人間国宝がいるわけじゃないかっ!」

「……凄いベタにボ口を出したな、警官のおっさん。」

淳は冷や汗を拭いながらニヤリと笑った。

「当然。だってわざとだもーん。」

「……？」

二人の間に少しの沈黙が訪れる。

「何もかも理解出来ないってか？ このく人気者超人リアクションが……。」

淳の性格変化のあまりの激しさに、空蔵は何も反応できないでいた。空蔵が我に返って淳の方を見ると、その手に二丁の回転式拳銃が握られていた。

こんな場面はおろか、その体質上大した修羅場に出会い得なかった空蔵でさえこれくらいのことにはわかった。

これ以上何もせず此処に留まるのは危険、抵抗しなければ死につながり得る状況に自分がある……と。

「自分の体質に祈ってるのか？ ……無駄だな。……俺はお前が大っ嫌いだ！」

にやけながら淳はそう言った。空蔵は体の震えが止まらないことに今ようやく気づいた。

「……どうすればいいんだっ」

「ま……的とになってもらうぜ、人気者様よお……。」

どうやら少年漫画な世界観に巻き込まれたみたいだ。(後書き)

更新遅くてすいませんm(_____)m

頑張るので見捨てないくださいね？

覚醒者とサポーター

淳が大声を上げ空蔵が目を見開いた刹那、二つの青白い閃光ひかりが空蔵の頭上数センチで交差した。自身の後ろを振り返った空蔵の顔が見る見る内に青ざめていく。空蔵の背後にあつたはずの壁は跡形もなく消え失せ、そればかりかその奥の二、三室の壁すらも破壊されていた。

たった今幾つもの部屋を犠牲にして廃墟に作られた窓から真冬の冷たい風が吹いてくる。

空蔵の目前に立っている男は先ほどまでの軽い雰囲気的中年警官ではない。

その男はまぎれもなく、プロフェッショナルが狩りをする時のものと見て相違ない、冷たい瞳をした獣だった。

「こうヤンチャボーズどもの世話ばつかしてるから腕が鈍るのかね？…外しちゃったよ」

淳は無表情で淡々と言う。

「このオッサン本当にやばい…。早く通報しないとっ」

「悪いが…世間的に今、お前は傷害事件を起こした容疑で逮捕され署に連行中、ってことになってる。」

空蔵は横倒しになった椅子の脚に手枷の鎖を何度も何度も叩きつけ枷を解こうとしている。

「愚かなガキめ。ここから逃げ延びたところで、傷害事件の実行犯の言葉を誰が信じる？」

「権力や政治的な圧力で警察や報道を動かせるっていうのはフィクションの世界の話だろっ!？」

空蔵の叫びに見向きもせず、淳はほくそ笑む。

「お前さんを辛い目にあわせてる連中はな、お前のような一学生の想像を遥かに上回る権力ちからを持っている。…日本に限らず世界各国、どの国が戦争をし…どこの国が勝利する。今までもこれからもやつらは時代を、世界を掌握し続けるっ」

「ふざけんなっ、そんな馬鹿な事が…」

言いかけた空蔵の首根っこを淳は力いっぱい掴む。そして……。

「信じられなければ消える。戦う勇気がないのなら死んでしまえっ。」

「……………っっ」

淳の右手の拳銃、空蔵の額に向けられた銃口が青白く光る。

「…………イデメは格好よくないぞ、第三司令官補佐殿」

かすれたその声を耳にし空蔵は何が起こったかに気づいた。

先ほど消滅した壁の隅に落ちている淳の銃。さらに多くの冷風を招き入れた天井の大穴。

かすれた声の主、この目の前に立っている小柄な老人が淳の拳銃を蹴飛ばしたのだ。まだ学生で人生経験の少ない空蔵でも、老人の登場後淳が明らかに萎縮していることがすぐにわかった。その老人が、淳が先ほど口にしたく連中>つまりそのく組織>における淳の上司であることも察しがついた。

老人は空蔵の方を見てニコニコと笑っている。

「…………あの…………」

「帰って来るなんて聞いてねえぞ、第三司令官様よお…。」

老人は淳の失礼な態度に腹を立てる様子もなく、ホッホッホと笑う。「申し送れましたな立花くん。わたしは哲夫・ジョン・マーキュリ

「第三司令官、名前は本来の哲夫に、海外に出向いた際に現地の友人から貰った名前を加えたものでな。わたしも気に入っておるのじや」

空蔵はまだ完全に状況が飲み込めていないのか何も喋れない。

「話が脱線してるぜ爺さん。こいつも一応限りなく覚醒者かくせいしゃに近い人間だからな、説明してやんねえと。」

「……覚醒者？」

哲夫司令官と名乗った老人は大きな咳払いをし、話し始める。

「立花空蔵くん、君は誰にでも好かれる……誰にも嫌われない、という能力……いや特性を持っているね？」

空蔵はこくりと頷く。

空蔵の中では、城嶋淳が危険人物でまだ用心した方良いと思っているのに対し、哲夫司令官は別だった。第一印象から空蔵は既にこの老人に心を許してしまっていた。哲夫司令官が話し始めようとしている最中、空蔵は自分がこの調子だと詐欺にでも引っかかるのではと少し危惧……というより自己嫌悪していた。

「その＜特性＞は絶対的な影響力を持つているように見える。だが、実は君を好かない人間、嫌える人間が存在する。」

空蔵は驚きを隠せなかった。

「自分を嫌ってくれる人間がいる――」

「暴言を浴びせても感謝しない人間がいる――」

「対等に付き合ってフェアに友達になれる人間がいる――」

ただそれだけのことで空蔵はこの世の＜奇跡＞という代物に出会った気持ちになった。

「＜特性＞の影響力を受けない人間には全て共通点がある。」

司令官は意味ありげに微笑んだ。

「…共通点？」

「うむ、その人間たちは皆」

静寂。空蔵の唾を飲み込む音が部屋に響き渡る。

「種類や性質は違えど君と同じく何らかの特性を持っている。」

「特性っ！？ 俺以外にも不思議な体質の人間がいるってこと？
それがさっき言ってた覚醒者ってやつ？」

空蔵の質問攻撃に全く動じず、司令官は空蔵に温かい煎茶を差し出す。

「思考力は合格点じゃな。…じゃが、一つはずれ。」

空蔵は首をかしげる。

淳は司令官は後ろで退屈そうに煙草を吹かしている。

「君をはじめとする特殊な人間がその特性に見合った戦闘能力を手に入れるという現象が稀にある。＜覚醒者＞というのは戦闘能力を得た者を指す言葉じゃ。他にも色々呼び方はあるが、これが一番伝わりやすくポピュラーな呼び方なでな。」

「でも、なんで俺を此处に？ 俺は別に、その…＜覚醒者＞（？）ではないよ。」

「新開発された装置によってわかるんだよ、＜覚醒＞が近い人間が…な。」

淳の言葉の後、司令官はやたら嬉しそうにウンウンと首を縦に振る。

「俺も爺さんも＜覚醒者＞だ。ちなみにお前に声をかけた目的は、別に実験台にしたりとか殺したりとか…そういうことじゃあない。」

「じゃあ、どういうことなの？」

淳は煙草を灰皿に処理し、ニヤリと笑う。

「お前これからありとあらゆる勢力に狙われるぞ。」

空蔵の表情が固まる。

「この廃墟から出た瞬間に殺される可能性もあると言ったらわかりやすいか？」

覚醒者とサポーター（後書き）

そもそも楽しみにしてくるような親切な方がいたかどうかは置いておいて…。

更新とても遅れてしまい申し訳ありません（汗

地道にですが、これからも更新していきます。

温かい目で見守っていただけると幸いです。

一夜の悪夢

「冗談じゃない――」

「冗談じゃないよ――」

――勘弁してくれよ、ホント――

廃墟の窓から脱出するときに体に纏わりついたガラスの破片を必死に払い落としながら雑木林を駆け抜けるのは、世界一好かれる人間であること以外は極々平凡なはずの高校生。空蔵は淳や哲夫司令官を振り切り、あの廃墟の遙か遠くまで逃げおおせることが出来たのである。ところで、城嶋淳と名乗る警官、自身を哲夫<司令官>と称する愛想の良い老人。この二人が空蔵に告げた映画やアニメのような、<非現実な事実>には空蔵自身も承知済みの明確な根拠がある。

まず一つが空蔵の<特性>……いや、もはや<能力>かも知れないが……。実際に空蔵が誰にでも100%好かれてしまうということ。そして二つ、自身を嫌うことの出来る人間の存在。三つ、城嶋淳の能力、である。以上三つの根拠を理解した上でまだ、空蔵はそうあっさりとか覚醒者>やそれを管理する<組織>の存在を認めることは出来なかった。認めることで何かが変わってしまうのではないか、そう恐れていたからである。

「つつ!?!」

突如左足を奔った激痛に顔を歪め、空蔵は派手に転倒してしまう。

「痛……。何が起こったんだ……。」

空蔵は激痛の奔った左足を見て、絶句せざるを得なくなる。

粘膜のようなものと鋭利な棘を表面に持ち、動きはうねうねと気持ち悪い。未知の宇宙人の触手のようにくそれくは空蔵の左足を締め付け、肉を棘で抉る。眉間にしわを寄せても下唇を噛んでも、途絶えない痛みが空蔵をじわじわと苦しめる。空蔵は直感的に理解した。淳が先ほど言っていたくありとあらゆる勢力くとやらが自分の命を脅かしに來たのだと……。

出血のせいなのか、触手のようなくそれくに毒が塗られていたのかはわからない。

だが、空蔵は薄れ行く意識の中でしつかりと聞くことは出来なかったが、かろうじて見ることはできた。真っ白なタオルを頭に巻きつけた大柄な男が無線機に向かってとても嬉しそうに談笑しているのを……。

男は興奮抑えきれぬにやけ面で言った。

「俺だ、■だ。たった今く覚者くのを発見した、。未す。か？」

——だめだ、意識が。会話聞こ…えない——

一夜の悪夢（後書き）

中途半端な区切り方ですいません m (| |) m

夢？

このまま終わることがないと思っていた、空蔵にとって最悪な逃走劇は意外な形で幕を閉じた。空蔵は必死に昨夜の出来事を振り返っていた。

そう、空蔵がどれだけ頭を回転させてもどういった経緯で帰宅し平然と登校しているのか、その記憶がなかったのだ。

下校中に拉致されて、自称警官男と哲夫ナント力って名乗った老人、覚醒者とか特性とかいった毎週月曜発刊の少年誌風味な話。話を聞き終わってその場から逃げ出したことを思い出した。

空蔵は怠慢な教師の退屈な授業を左右どちらの耳にも受け入れずに思考を続ける。

更にそれより先の記憶も必死に思い返してみる。こんな体験は空蔵自身も人生初だった。まるでみ消されたかのように、記憶にかかるとる靄のように鬱陶しいもの。取り払おうともがいても記憶探しの作業は一向に進みそうもない。

すっかり聞き慣れたこの学校のチャイムを耳にし、空蔵は我にかえる。

「今日話した範囲をテキストで復習すること。今週末を提出期限とする。」

そそくさと教室から出て行こうとする教師が出入り口でそう言い残す。

空蔵にとって相も変わらず在り続けたものはこの「特性」であった。

自分で思っておいて空蔵は呆れて苦笑いを浮かべる。そもそも昨夜の出来事は現実にあつたことなのだろうか……？ 自分と同じ境遇にある人間の存在、自分を憎み更に命まで狙ってくれる人間の存在を無意識中に渴望していただけではないのか？

空蔵は昨夜の出来事が現実だと断言出来なくなっていた。

休み時間の終了を告げるチャイムとともに隣のクラスの女子生徒が教室に入ってくる。

「立花空蔵くん……よね？」

またか、と空蔵は大きなため息をつく。

「何の用？ 告白ならお断りだけど……。」

セールスを断るように空蔵が言った。

「君を呼んできてほしいって言われた。」

女子生徒がそう言う。その素気なさに空蔵の脳裏に覚醒者の話が過つた。

「わかった、伝言ありがとう」

「告白も伝言も絶対にしたくないんだからっ！！」

素気なさの理由は時代遅れで熱血漫画チックな覚醒者なんてことのせいではなく、ただ単に少し前から流行りのツンデレなだけだった。空蔵は昨晚のようなことを本気で渴望していたんだと自覚し、ますます情けなくなった。

「実在するもんなんだ、ツンデレって」

空蔵は廊下の薄汚い天井を見上げて独り言を言った。

廊下を抜けて階段を下りて廊下を抜けた先、下駄箱で待っていたのは女子生徒でも昭和の不良生徒でもなかった。空蔵はその姿を目にした瞬間、自分の心臓がはねるように感じた。それもそう、そこでニヤリと笑っている男は昨夜自分に銃を向けてきた自称警察官男だったのだから。

「よ、人気者。」

城嶋淳がそう言って右手を上げた。

「あなた、昨日の……。」

「恋愛シミュレーションな展開だと思ったら違ったみたいな顔じゃねえか。」

空蔵は嫌な表情^{かお}をする。

昨夜とのキャラの豹変^{ひょうへん}ぶりに対してだ。

「おいおい、冗談だつて」

「じゃあ何の用ですか？」

空蔵は冷たくそう言い返す。

「正確に言つと勧誘方針の変更だ。」

空蔵は、よくわからないという反応をする。

「昨夜の記憶がないだろう？」

「一部だけけど」

淳は眉間にしわを寄せて難しい表情をする。

「昨夜は俺の後輩が独断で再び拉致を試みてな……。」

「だが、それと同時に＜立花空蔵＞に関するデータに手違いがあることが判明した。簡単に言つと最愛の恋人を殺人鬼と勘違いした、みたいな……。」

「いや、全然わからないんだけど。」

空蔵の答えに淳はすこぶる嫌な表情をする。どうやら説明が苦手な上面倒らしい。

「つまり昨夜の段階でお前がく特A級の危険人物>であるという誤報が俺に届き、ああいった手段をとらざるを得なかった。哲夫指令の爺さんはあの段階で真相を知っていたみたいだな。」

淳は煙草を口に咥え、まるで一仕事終えたかのような表情を見せる。空蔵は淳の肩をポンポンと叩き、当学校内全域禁煙となっておりますという黄色い看板を指で示す。空蔵と淳、二人の男はしばらく黙り込む。そして、淳は突然看板を蹴り倒し咥えていた煙草に火を灯す。

「よって上層部からく平和的で心地良い手段で勧誘せよ>との指令が下った。」

淳が白い煙を吐き出すのを空蔵はただただ呆然と眺めていた。

「ってことで、勧誘される！ 手際よく仲間になって、俺の功績…出世の礎となりやがれっ！！」

「三〃四行前を読み直してくれよ……。」

二人の間に再度緊迫した空気。

「決めたっ！」

「おお！ 出世の礎として利用されてくれるかあ〜！」

子供のようにな无邪気に笑う淳に対し、空蔵は首を横に振る

「いや、絶対に入りません。……だって子供じゃないんだし、そんな漫画みたいな非現実には物見遊山で関わって怪我でもしたらどうするんですか？ 保険おりるんですかあっ!?!」

怒涛の反論に淳は絶句する。

空蔵も空蔵で息を切らしている。

「中々最近の高校生は冷めてんじゃねえか……。」

再び沈黙。

「ふざけんじゃねえっ！ 出世させろっ、礎として死んでいけえっ
！！」

「絶対に嫌だっ！」

空蔵は校門をよじ登り、学校外へと飛び出した。

「あつ、お前、……逃げんなやっ」

「絶対に仲間に招き入れてやるからなあーっ！っ！」

ご近所さんの目も気にせず大声で叫ぶ自称警官を後に、空蔵は商店街を走りぬけた。

夢？（後書き）

二ヶ月以上空いたので前回分を読みながら書きました。
m (| |) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629i/>

人気も程々に。

2011年10月6日06時24分発行